

-
- 1 この時のインタビューは「華僑林義順西北の財源開拓を語る」、副題「救国は西北の開拓が必須 術無き事を憂うべからず」として『北平民国日報』（詳細は 1932 年出版の『華僑週報』、21 期（71-74 頁）の転載記事を参照）に掲載されている。
-
- 2 柯木林『『澄邑馬西郷林氏族譜』的发现及其历史价值』、柯木林著『石叻史記』（シンガポール：青年書局出版、2007 年 8 月）、116 頁。
-
- 3 陳楚楠追記「晚清園与中国革命史略」、『東南亞研究學報』（創刊号）、（シンガポール大学歴史系、1970 年 8 月）、53 頁。
-
- 4 柯木林『从龙牙门到新加坡：東西海洋文化交汇点』（北京：社会科学文献出版社、2016 年 12 月第 1 版）、1 頁。
-
- 5 Yuen Choy Leng. "The Japanese Community in Malaya before the Pacific War: Its Genesis and Growth", *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol 9, No 2, *Japan and the Western Powers in Southeast Asia*(Sep.1978), Cambridge University Press, 164-166 頁。
-
- 6 1891 年の時点でシンガポールにはすでに日本人の共同墓地があった。その墓園はヨー・チュー・カン（Yio Chu Kang）の閑静な住宅街にあり、具体的な場所は 825B Chuan Hoe Avenue である。現在、墓地の占有面積は 3 万平方メートルで、およそ 1000 人のシンガポール日系人市民と兵士の墓があり、その多くは 20 世紀初期に埋葬されたものである。日本人墓地は当初三人の日本人娼館経営者の共同出資で建てられたもので、貧しく身寄りもなかったからゆきさんを埋葬するための墓地であった。墓地は 1947 年以前からここにあったが、1987 年に記念公園となり、シンガポール日本人会の管理で墓地公園の保護と修理が行われている。
-
- 7 管見の限り、本地域の日本研究に関する資料の出典は、英文資料はおもに英植民地政府のデータを引用したもの、日文資料は日本領事館のデータ（一部はシンガポール日本人会が出版した『戦前のシンガポール日本人社会』に記載された日本領事館のデータ）を引用したものと思われる。
-
- 8 陳丁輝、潘宣輝主編《海外逢知己：孫中山与日本特別展》（シンガポール：晚清園—孫中山南洋記念館、2013 年）、7 頁。
-
- 9 海峡植民地とはシンガポール、マラッカ、ペナン島の三地域を指し、華人は俗にこれを三州府と称した。英国植民地時代の政治体系は 1826 年から 120 年間続き、1946 年によりやく終了した。海峡植民地の行政府は初めペナンに設置されたが、1832 年にシンガポールに移設された。1867 年 4 月 1 日、海峡植民地は正式にイギリス植民地省の管轄となり、知事がシンガポールに駐在した。

-
- ¹⁰ Yuen Choy Leng. “The Japanese Community in Malaya before the Pacific War: Its Genesis and Growth”、前掲書、171 頁。
-
- ¹¹ 《海外逢知己：孫中山与日本特別展》、前掲、11 頁。シンガポール日本人会史跡資料部により、1998 年に歴史資料に基づき企画され、大正年間（1912-1926）におけるシンガポール日本人商店及びその主要ランドマークの分布図が再現された。
-
- ¹² Yuen Choy Leng. “The Japanese Community in Malaya before the Pacific War: Its Genesis and Growth”、前掲、166-167 頁。
-
- ¹³ 同上、175 頁。
-
- ¹⁴ 同上、173 頁。
-
- ¹⁵ 同上、174 頁。
-
- ¹⁶ 同上、175 頁。
-
- ¹⁷ 同上、174-175 頁。
-
- ¹⁸ 柯木林「シンガポールにおける日本統治時期の中断」『龍牙門からシンガポールへ：東西海洋文化の合流点』、前掲書、219 頁。
-
- ¹⁹ 日本国領事館は 1879 年 4 月に設立され、領事館跡はノースブリッジ・ロード（North Bridge Road）に所在する。
-
- ²⁰ 胡亜基の正式な肩書は「副領事」で、また当時彼は無給であった。日本国立公文書館所蔵『太政類典』の外務省上申『シンガポール駐箚領事の廃止』（明治十三年十二月二十八日）には「在留清国人胡璇澤、無給で領事に任命」との記載がある。胡亜基を駐シンガポール領事に推薦したのは安藤太郎領事であった。日本国立公文書館所蔵『太政類典』、明治十二年（1879 年 2 月 10 日）“安藤領事より推薦”（安藤領事が胡亜基を駐シンガポール領事に推薦、NAJ- 太政類典_明治十二年 HooAhKayViceConsulate_M0000000000000860816_027807463307）及び『公文書・明治十三年・第二百巻・明治十三年十二月・外務省』（1880 年 12 月 4 日）「在留清国人胡璇澤を無給で領事とする」（胡亜基は当時いかなる給与も支給されていなかった、NAJ- 公文録_明治十三年_Abolishment of Consulate in Sg_M0000000000000133775_0049）を参照。

HooAhKayViceConsulate_M0000000000000860816_027807463307)及び『公文書・明治十三年・第二百巻・明治十三年十二月・外務省』(1880年12月4日)「在留清国人胡璇澤を無給で領事とする」(胡亜基は当時いかなる給与も支給されていなかった、NAJ- 公文録_明治十三年_Abolishment of Consulate in Sg_M0000000000000133775_0049)を参照。(ここで補足すると、所謂『公文録』とは当時の実際の文書、『太政類典』は同時期の記録であり、両者の文章は同じものである。日本国立公文書館の『太政類典』には、1867年から1881年までの太政官の日誌、公文録などの中に記載された法令など関連事項の前例が記録されている。『太政類典』の文献は制度、官制、官規など19の類別があり、年代順に編集されている。『公文録』は1868年から1885年に太政官に上申された正式文書を指す。これらの文献は関係部門と年代によって編集されている。ここで引用した資料は『公文録』に編集されてから、その後に『太政類典』に書き写されたものと思われる。しかしすべての内容が『太政累典』に写されるのではなく、前例のない事項と法令／規定のみが転記される。台湾中央研究院所蔵の1937年出版『明治初年に於ける香港日本人』の標題によれば、安藤は1874年に駐香港日本副領事に任ぜられ、1877年に正領事(http://rarebooks.ith.sinica.edu.tw/sinicafrsFront99/search/search_result2.htm?xmlId=0000127722&display=detailを参照)に抜擢された。安藤は父が鳥羽藩の藩医であり、早くから著名な学者に漢学、蘭学、英学を学び、後に海軍操練所、陸軍伝習所に入隊、徳川幕府の騎兵となった。戊辰戦争に敗れ、一年間監禁された。大蔵省勤務を経た後、外務省へ転任し、岩倉使節団に同行して西洋各国を訪問した。香港領事、上海総領事、ハワイ領事を歴任。ハワイ領事任期中、キリスト教に入信し、外務省の初代移民課長に就任。農商各省商工局長を離任後は宣教活動と禁酒運動に従事した。日文関連資料は、呉玉美シンガポール国家図書館助理図書館員の協力により翻訳。ここに感謝の意を述べたい。

²¹ 中国第一歴史档案館編「英国駐華使臣ウェードの中国駐シンガポール領事胡璇澤病没に関する恭親王への覚書」、『清代中国と東南アジア各国との関係档案史料匯編』(北京：国際文化出版公司，1998年4月第1版)、挿絵頁。又は：1880年3月胡亜基が没した後、一時期その職位が空位となったため、日本政府は駐シンガポール日本領事館の廃止を検討した。1889年になって公文書に初めて駐シンガポール及び駐マニラ領事館の設立についての記載がみられる。このことから、1880年3月以降暫定的に駐シンガポール日本領事館が廃止されたことが推測できる。『公文録・明治十三年・第二百巻・明治十三年十二月・外務省』(1880年12月4日、NAJ- 公文録_明治十三年_Abolishment of Consulate in Sg_M0000000000000133775_0049)。

²² 《海外逢知己：孫中山与日本特別展》、前掲書、9頁。

²³ 《海外逢知己：孫中山与日本特別展》、前掲書、7頁。

²⁴ 柯木林「まさに“海外で知己に逢う”」『聯合早報』2013年6月15日。

²⁵ 同上注。

-
- ²⁶ 《海外逢知己：孫中山与日本特別展》、前掲書、12 頁。
-
- ²⁷ 同上注、16 頁。
-
- ²⁸ 顔清湟著、李恩涵訳『シンガポール・マレーシア華人と辛亥革命』（台北：聯経出版事業公司、1982 年）、108 頁。
-
- ²⁹ この題字は太平天国の指導者石達開（1831-1863）の次の詩句にちなむ：「中国の文明が満清の手に落ちるのになぜ耐えられようか。中原の豪傑を率いてわれらの山河を奪回せん」。張永福はこれを一部書き換え、『図南日報』の革命宣伝の標語とした。
-
- ³⁰ Chen Mong Hock, "The Early Chinese Newspapers of Singapore 1881-1912", (Singapore: University of Malaya Press, 1967)、85 頁。
-
- ³¹ 孫文のシンガポールでの連絡先は「四大寇」の一人・尤列（1866-1936）であった。1887 年、孫文は香港に留学していた時、勉学の傍ら革命運動に尽力した。1901 年初め、惠州蜂起（1900 年 10 月）が失敗したため、尤列は清朝廷から指名手配されたが、シンガポールに逃亡し、中和堂組織の発起人となり、反清活動を継続し、惠州革命軍が用いた「青天白日旗」を標識として掲げた。当時尤列は Pickering Street（ピッカリング・ストリート、現 Upper Pickering Street（アッパー・ピッカリング・ストリート）で漢方医を営み、性病の治療などで知られていた。尤列はまた『図南日報』を定期的に孫文に送っていた。
-
- ³² いわゆる「辛亥人物」とは、1901 年から 1911 年までの間、孫中山と何らか接触のあったシンガポールの歴史的人物を指す。彼らの行動から、中国近代史におけるこの重大事件がシンガポール社会に与えた衝撃が窺える。
-
- ³³ 『シンガポール・マレーシア華人と辛亥革命』、前掲書、108-109 頁。
-
- ³⁴ 柯木林主編『シンガポール華人通史』（シンガポール：シンガポール宗郷会館連合総会、2015 年 11 月）、750 頁。
-
- ³⁵ 柯木林主編『シンガポール華人歴史人物列伝』（シンガポール：教育出版私営有限公司、1995 年 11 月、第 1 版）、108 頁。
-
- ³⁶ 張永福の父・張礼はビーチ・ロードで長美号を創立し、絹織物や絹糸の販売から各種商売や不動産投資などを行なったため、没したときすでに非常に裕福な大地主であった。

³⁷ 『シンガポール華人歴史人物列伝』、前掲書、88-89 頁。

³⁸ 張永福『南洋と民国創立』（上海：中華書局、1933）には張永福の詩作が多数収載されている。

³⁹ 清末の改革派が東南アジア地域で発行した最初の機関紙である。1898 年 5 月 26 日（一説に 1899 年 5 月 17 日）、シンガポールで創刊。新聞社の所在地はシンガポール Pekin Street（北京街）で、邱菽園が創立し、康蔭田と黃伯耀、黃世仲兄弟を主筆として招き、林文慶が英文の編集を手がけた。「清国皇帝に政治体制改変を提唱することを主旨」とした。1899 年秋、康有為はシンガポールで保皇会を組織し、邱菽園が同会の南洋分会会長に推挙され、同紙は保皇党の代弁者となった。

⁴⁰ Chen Mong Hock, “The Early Chinese Newspapers of Singapore 1881-1912”、前掲書、83-85 頁。

⁴¹ 「晚晴園与中国革命史略」、前掲書、53 頁。

⁴² 『シンガポール・マレーシア華人と辛亥革命』、前掲書、109-110 頁。また『南洋と民国創立』（前掲書、9 頁）によれば：“晚晴園は、もとは我が母が晩年静養するための別荘だった。私は当然ながら母に政治犯と行動を共にしていることを隠すことはできず、すぐに母にこう告げた。孫先生がここへきて革命を宣伝するため、晚晴園をその機関としたいと。母は、それが革命を提唱し満清転覆をはかる孫先生だと知ると、微笑みながら言った…すぐに林義順に命じて晚晴園を然るべき状態に整えなさいと”。晚晴園を貸し出すことは、張永福の母の支持を得ていたことが窺える。

⁴³ 『叻報』、1921 年 5 月 11 日。

⁴⁴ 『シンガポール華人通史』、前掲書、150 頁。

⁴⁵ 左秉隆（1850-1924）、字は子興、別号を炎州冷宦といい、本籍は遼寧省瀋陽。清に仕えた後、漢軍正黄旗に所属し広州に駐留した。民国成立後は広東省番禺県に所属。近代中国からシンガポールに派遣された最初の専業外交官であり、シンガポール領事を前後二度務めた。一度目は 1881 年から 1891 年で、十年間連続で務めた後に香港へ移動となる。1907 年 9 月、再びシンガポールで総領事となり、1910 年 9 月に任期満了で辞任した後もシンガポールに留まった。1916 年香港に転居し、同年 9 月に広州に戻り、1924 年に広州で没する。享年 75 歳、広州北郊獅帶崗之原に埋葬された。左秉隆著『勤勉堂詩鈔』（シンガポール：南洋歴史研究会、1959）附録の「左子興先生年譜」（抄録）を参照。

⁴⁶ この電文は清朝廷の機密資料通し番号 095 であり、「軍機処より、シンガポール総督のため に人員を派遣し孫中山の行動を監督し策を講じて強制出国させた事件に関する外務部への電報」（光緒三十四年正月初五日 1908 年 2 月 6 日）と題されている。この電文以外に、「シンガポール総領事左秉隆より、孫中山の活動状況に関する外務部への報告（光緒三十三年十二月初一日 1908 年 1 月 4 日）；「軍機処より、策を講じてシンガポールから孫文を強制出国させたことに関する両広総督広西順撫への電報」（光緒三十三年十二月二十八日 1908 年 1 月 31 日）、「軍機処より、策を講じてシンガポールから孫文を強制出国させたことに関する中英大臣李經方への電報」（光緒三十四年正月初七日 1908 年 2 月 8 日）及び「両広総督より、英国大使がシンガポール総督へ打電し、孫中山を強制出国させることを促す外務部への電報」（光緒三十四年正月初九日 1908 年 2 月 10 日）など、中国第一歴史档案館編『清代中国と東南アジア各国との関係档案史料匯編』（北京：国際文化出版公司、1998 年 4 月第 1 版）、173-174 頁を参照。

⁴⁷ CO273/343 dated 9th April 1908、外務部により駐北京英国公使 J.N.Jordan に宛てた 1908 年 2 月 9 日の書簡。

⁴⁸ 『シンガポール華人通史』、前掲書、90 頁。

⁴⁹ 邱菽園は豪商であり、独自の資本で『天南新報』（1898）を創刊し、主編を兼ねた。自らしばしば社説を書き、維新救国を提唱した。1900 年 7 月、邱菽園は 25 万シンガポールドルを投じて保皇派の漢口での蜂起を支援した。しかし康有為がこの寄付金を押さえてしまったため、漢口蜂起は日程が何度か変更されて失敗した。邱はそれを知って激怒し、『天南新報』（1901 年 10 月 22 日付）において、維新派と断絶し清国に忠節を尽くすという公開声明を発表した。だが、別の文章では両者の関係は断絶しなかったことが書かれている。というのは、康有為はその後にも邱菽園の詩を評論していたからである。関連する書簡は現在も邱菽園の家族のもとに保管されており、両者がその後文通していたのか、やはり連絡を取り続けていたのかは、依然懸案となっている。

⁵⁰ 『龍牙門からシンガポールへ：東西海洋文化の合流点』、前掲書、387 頁。

⁵¹ 邱菽園はかつて『天南新報』（1899 年 4 月 11 日）に掲載された「康有為の米国との往来が中国の政治家に与える一大問題」のなかで、否定的な言葉で孫中山を形容した；また同報 1900 年 8 月 27 日「孫文行動略志」や 1900 年 9 月 7 日「孫文のシンガポール来訪を振り返る」などで、孫文一行の来星はよくないことであつたと批判した。文中で直接孫文を批判したのは辛亥革命以降であり、彼は自分の詩のなかで、また『振南報』で発表している。—李元瑾『東西文化の衝突とシンガポール華人知識分子の三種の反応：邱菽園、林文慶、宋旺相の比較研究』（シンガポール：シンガポール国立大学中文系、八方文化企業公司、2001 年）、224-226 頁。

⁵² 李励図、「海峡政府の孫文に対する態度（1900-1911）」、前掲書、164-177 頁。

53 同上、164 頁。

54 同上。

55 陳徳仁 安井三吉共著、『孫文と神戸』（日本：神戸新聞総合出版、2002 年 1 月、日本語版）p.33 頁：孫文は 1895 年 11 月 9 日または 10 日、陳少白、鄭士良と香港から“広島丸”に乗船し横浜に向かった。横浜で三、四日逗留した後、11 月 12 日に横浜を離れた。こうした状況からみると、興中会横浜分会は 1895 年 11 月に設立されたものと思われる。

56 孫文が八回来星したことに 関する 研究は、Wang Gungwu, “Sun Yat-sen and Singapore”, Journal of the South Seas Society, Vol XV, Pt2 (Singapore: The South Seas Society, Dec 1959)、55-68 頁を参照されたい。九回の日程は次の通り：
第一回：1900 年 7 月 9 日から 1900 年 7 月 12 日、四日滞在、ラッフルズホテル泊；
第二回：1905 年 7 月初め、一日滞在、船上に宿泊；
第三回：1905 年 10 月 /11 月、晚晴園に約二週間滞在（新たな資料を発見）；
第四回：1906 年 2 月 16 日、晚晴園に二週間滞在；
第五回：1906 年 7 月初め、一か月滞在、晚晴園泊；
第六回：1907 年 3 月末、数日間滞在、Orchard Road（オーチャード・ロード）111 号に宿泊。
第七回：1908 年 3 月から 1909 年 5 月、シンガポールに十か月半滞在、その他は北上してベナン、バンコクなどの場所で活動。1908 年 12 月以降は晚晴園を離れ、二か所のホテルで宿泊：一か所は 85 号、もう一か所は Cecil Road（セシル・ロード）77 号；
第八回：1910 年 7 月 11 日、一週間滞在、セシル・ロード 77 号のホテル泊；
第九回：1911 年 12 月 15 日、一日滞在、“Golden Bell Mansion（ゴールデン・ベル・マンション）”泊。
上述した孫文の計九回のシンガポール滞在の時間と場所は、筆者が次の資料からまとめたものである。
(a) Wang Gungwu, “Sun Yat-sen and Singapore”、前掲論文、55-68 頁。
(b) 陳楚楠追記「晚晴園と中国革命史略」、『東南アジア研究学報』（創刊号）、シンガポール大学歴史系、1970 年 8 月、50-54 頁。
(c) 『南洋と民国創立』、前掲書、4-49 頁。
(d) ゴム歴史文物研究小組編『晚晴園』（シンガポール：中華総商会、1971 年）、21 頁。
(e) 杜南発「孫中山は結局何度来星したか?」、周兆呈主編『百年辛亥 南洋を振り返る』（シンガポール：八方出版、2011 年）、10-17 頁。

57 「移情閣」は日本の兵庫県神戸市にあり、日本で唯一の孫中山を記念する博物館である。この建築物の前身は、神戸で活躍した華僑商人呉錦堂(1855-1926)の「松海別荘」である。1915 年初め、もとの別荘の東側にこの中国式の建築が建てられ、外観は三層の八角を呈しており、「移情閣」と名付けられた。外観が六角形のような形状のため、現地の人々には「舞子の六角堂」と呼ばれている。1913 年 3 月 14 日、孫文が神戸を訪れたとき、現地の華人や財界人たちがここで孫文を招き昼の食事会を開いた。1983 年 11 月、兵庫県はそれまで「移情閣」を管理していた神戸華僑総会から寄進を受け、建築の修繕を開始した。1984 年 11 月 12 日、孫文の生誕記念日に、「孫文記念館」の名称で一般公開された。1993 年 12 月、兵庫県指定重要文化財に指定された。1994 年 3 月、明石海峡大橋の建設に伴い、移情閣は一時取り壊され、元の位置より 200 メートル西南方向、すなわち現在の位置に移された。2015 年 10 月 31 日、筆者は招待を受けここで講演をおこなった。

⁵⁸ 柯木林「清末の海外紀行文におけるシンガポール」『石叻史記』、前掲、12-18 頁。

⁵⁹ 『シンガポール・マレーシアの華人と辛亥革命』、前掲書、112-113 頁。

⁶⁰ 『龍牙門からシンガポールへ：東西海海洋文化の合流点』、前掲書、364 頁。

⁶¹ 李為経は字を宏論、号を君常。明末清初の福建省同安県嘉禾里（現在の厦門）の人。清国の統治から逃れるため、海を渡りマラッカで商売し、オランダ植民地政府からカピタンに任ぜられた。カピタン在職中、ブキット・チャイナ（Bukit China）を購入し華僑の墓地を建てた。没後はマラッカのブキット・チャイナに埋葬され、『甲必丹李公濟博懋勛頌德碑（カピタン李公濟博の大功と徳を称える碑）』（康熙二十四年、西暦 1685 年）と記された碑が残っている。

⁶² 李奕志「神秘祠堂社公廟」、林孝勝等『石叻史記』（シンガポール：南洋学会、1975 年 4 月）、163-168 頁。

⁶³ 柯木林「シンガポールで辛亥百年を記念する意義」『聯合早報』2011 年 10 月 28 日。

⁶⁴ 注 7 を参照。

⁶⁵ Wang Gungwu, “Sun Yat-sen and Singapore”, 前掲論文、60 頁。孫文の晩晴園での日常生活は、張永福の回顧録『南洋と民国創立』（94-96 頁）によれば以下のようなものであった：「孫先生は物静かでいつも言葉少なで、大声で嘆いたり叫んだりすることはなく、喜びや苦悩をあからさまに表情に出すようなこともなかった。……就寝前には必ず入浴し、ゆっくりと時間をかけた。先生は何の道楽もせず、花の栽培も、犬や猫など小動物を飼うこともなく、骨董品を嗜好することも、宝飾品や写真機などの趣味ももたなかった。カルタなど賭け事は一切やらなかった……先生は飲食にも慎み深く、食事のときは箸を使い、ナイフとフォークは使わなかった。食事はよいものを選び、魚や肉より野菜を好み、酸味や苦み、極端な香りや味付けは好まなかった。砂糖は少量であっさりとした味を好み、甘すぎる味付けは好まなかった。酒やタバコは一切やらず、菓子類は好まず、果物を好んだ。最もよく食すのはバナナとパイナップル（＝菠萝。南洋では鳳梨と称する）のふたつであり、いつもバナナは世界中で、南洋産のミニバナナが一番美味しいと言い、パイナップルも南洋産のものが一番だと言っていた。山竹、驢亀（両者とも南洋産の菓子の名称）のふたつも美味しい菓子だと褒めていた。先生はしばしば食事を抜くこともあり、少しずつ何度も食べるという習慣もなかった。先生は朝食前には必ず遠方の友人から届いた書簡に目を通し、返事を書いた。手紙の中には急用でないものもあったが、先生はすべての手紙に同じように返事を書いた。食後は少々休憩してから、また各方面への書簡を書き、小昼どきになると、いつも十数篇の原稿を執筆し、夕食を済ませ客人が帰った後も、人と約束は多く、深夜まで執筆するというのが日常だった」。

中山大学歴史系孫中山研究室編、『孫中山先生を紀念する』（北京：文物出版社、1981年10月）の“革命団体を組織する”。

シンガポール同盟会の設立日時については、各方面で記載が異なる。多数の関係資料、馮自由及びその分会の指導者陳楚楠の著述では、1905年末に設立されたとされる。顔清煌は1904年4月6日をシンガポール同盟会設立の日としている。その後多数の学者の著作と論文で顔の説が認められたため、ほぼそれで定説となった。杜楠発は関係資料に基づき、シンガポール同盟会の設立を考証し、1905年11月以降である可能性が高いと指摘したが、それは定説の1906年4月と比べて半年早いことになる。同盟会シンガポール分会の同盟書類は、孫文と李竹痴らが晩晴園で協議し草案を作った。李竹痴は通常ペナンとヤンゴンの二か所で商売をしており、各地の方言に長けていたため、陳楚楠の紹介で、孫文の南洋各地における活動の案内人を務めた。初めに晩晴園で同盟会に加入したのは、陳楚楠、張永福、李竹痴のわずか三人だけ（『南洋と民国創立』、10頁参照）だった。張永福はその回顧録『南洋と民国創立』のなかで次のように述べている：「私はまだはっきりと覚えているが、孫先生……彼は先に起立して、右手を掲げ、非常に厳粛な態度で、私たちの前で宣誓した、……孫先生が宣誓書を読み終わると、李竹痴と永福、楚楠らが、孫先生の儀式に倣ってかわるがわる宣誓した。」同盟会の宣誓の辞は次のようである。“連盟人は×××××省××府××県の人、ここに誓う、蒙古の恵比寿を追い払い、中華を取り戻し、民国を成立し、地権を平等分配し、誓って忠誠を尽くし、志を最後まで貫き通し、その志を変えれば、これを罰せられることを厭わず」。(天運乙巳×月×日/中国同盟会会員×××)。同盟分会は陳楚楠を会長、張永福を副会長とした。また、孫文は彼らに「握手のサインと会話の秘訣」を伝授した。このことから、当時の同盟分会がまだ秘密組織だったことが窺える。翌日入会したのは林義順の一人のみで、数日後に李曉生、林受之ら六人が入会した。上述については次の資料を参照されたい：

- (a)『シンガポール・マレーシア華人と辛亥革命』前掲書、111頁。
- (b)「空白の足取り（上篇）：孫中山は一体何度シンガポールに来たのか?」、『百年辛亥南洋回顧』前掲書、10-17頁。
- (c)『南洋と民国創立』前掲書、10頁。
- (d)「晩晴園与中国革命史略」前掲書、52頁。

「晩晴園与中国革命史略」前掲書、52頁。

『南洋と民国創立』、前掲書、12頁：「同盟会が成立されたが、我々はかつてこのような組織をもったことはなかった。現在同志は二十数名となり、一旦同じ志をもてば、みな親しい関係になり、しばしば晩晴園に集い食事をともにし語り合い、それは午後から夜まで続き、興がのれば夜更けまで続いた」。

『南洋と民国創立』前掲書、13頁。

「晩晴園与中国革命史略」前掲書、53頁。

Wang Gungwu, “Sun Yat-sen and Singapore”、前掲論文、61・64頁。

73 同徳書報社の現社長湛承憲によれば、この扁額が現在も残っているのは、日拠時代、同徳書報社の同僚が孫中山自筆の扁額を日本人の破壊から守ろうと命の危険を冒して扁額を隠しておいたからだという。

74 これは 1896 年秋、孫文がロンドンで清国の公使館に捕らえられ監禁されたという国際的事件である。監禁されたのは 1896 年 9 月 23 日から 10 月 23 日までの間であった。事件後、孫文は乞われてこのときのことを『ロンドン受難記』として出版し、一躍有名になった。

75 陳少白（1869－1934）：本名は聞紹、後に白と改名、字は少白。主に字を用いた。日本逗留期間は陳璧、服部次郎と名乗り、広東省新会外海南華里の人で、清末の革命家であり、孫文、尤列及び楊鶴齡とともに「四大寇」と呼ばれた。

76 孫文と宮崎滔天の事績については、陳固亭著、三民主義研究所主編『国父と日本の友人』（台北：幼獅書店、1965）、3-8 頁を参照されたい。

77 滔天は孫文と知り合った後、孫文の英文著『ロンドン受難記』を日本語に翻訳した。また 1902 年には、自伝『三十三年の夢』のなかで、滔天は孫文の革命運動を紹介しており、これは辛亥革命と中日関係史の貴重な資料となっている。孫文は本書の序（原文は日本語）で次のように述べている。「宮崎寅蔵君なる者は、今の俠客なり。識見高遠、抱負凡ならず。仁を思い義を慕うの心を具え、危うきを救い傾けるを扶くるの志を発し、日に黄種の陵夷を憂え、支那の削弱を憫む。しばしば漢土に遊びて以て英賢を訪い、不世の奇勲を共に建て、興亜の大業を助け成さんことを欲す。吾人に支那を再造するの謀、共和を創興するの挙あるを聞き、千里を通しとせずして、相い來たりて交を訂し、期許はなほ深く、勸励きわめて摯に、之を虬髯に方ぶるに誠に之に優る有り。ただ愧ず、吾人は太宗の資なく、衛公の略に乏しく、馳驅数載、一事も成る無く、実に君の厚望に負くこと多きことを」。滔天は革命党の志士との交流も密であり、彼の東京の家は同盟会の機関紙『民報』の最初の発行所ともなった。1912 年、滔天は孫文とともに南京へ赴き、臨時政府成立の式典に参加している（和田正之、芦益平合著、「孙中山先生与日本九州」第二届海外人研究与文献收藏机构国际合作会议论文，香港中文大学，2003 年 3 月 12-15 日を参照）。1913 年 3 月、孫文は再度荒尾の宮崎宅を訪問し、宮崎家の人たちとそこに集まった荒尾村の村民たちの前で次のように発言した。「十七年の時を経てこうして荒尾村を訪問し、なじみの風景を目の当たりにしていることに至上の喜びを感じている。宮崎寅蔵君そして兄の故弥蔵君とは非常に親しい付き合いをさせていただき、我が国の大事にも全面的協力をいただいている。日中両国の関係が我々のこの深い友情のごとくあるならば、千年万年の後も、両国は必ずや互いに手を携えて協力し合い、仲睦まじく友好的関係となると確信している。また両国の発展と人民の幸福を今後も弛まず促進していく所存である。仁義道徳を重んじ、隣国のために心血を注いでくれる宮崎君のような義士を育んだこの荒尾村に、心から謝意を述べたい。ここに平岡村長をはじめ仁徳溢れる義士の方々に対し、衷心より敬意を表する」。当地の新聞熊本『日日新聞』によれば、孫中山の挨拶の後、一行は前庭で記念撮影し、午後 2 時 30 分にそこから万田坑へ出発した。宮崎寅蔵はまた張永福とも良好な関係を結んでいた。張永福の書簡（宮崎黄石氏所蔵）から張永福が日本に滔天を訪ねた際、彼の熱いもてなしをうけたことがわかる：“滔天先生御机下 ご尊顔を拝した後、長くご無沙汰をしております。敬い慕う先生がご健勝のこととお喜び申し上げます。先日江戸でお会いした際には熱いおもてなしをいただき感激至極に存じあげ忘れがたきことであります！帰星ののち、件の事業はすでに目鼻がつきました故、ここにご報告

申し上げます。初春の候何卒ご自愛のほどお祈りいたします。弟 張永福 方漢城（二月十日）”。この書簡には年号が明記されていないが、封筒に残された郵便印は 1919 年と表示されている。“件の事業はすでに目鼻がついた”と述べていることから、辛亥革命の後で書かれたものと思われる。さらに張永福のプロフィールをみると、1919 年からシンガポールでゴムの栽培を始め、また日本でゴムの靴製造機を物色し、Jalan Besar（ジャラン・ベサル）の工場で“テニスシューズ”を製造していたことがわかる。このシューズのブランドは“平民”といった。張永福は日本に遊歴したとき、現地で人々がゴム底の靴を履いているのを見て、軽くて丈夫だと思い、この事業に着手することを決めた。

78 康有為はシンガポールに塾居し、足取りも極秘とされ、外界の知るところではなかった。次の『星洲閑閑より星洲寓公へ贈る』という詩には、まさにシンガポールでの彼の生活ぶりが描き出されている：

私は君のシンガポールの家に住み、日々御馳走でもてなされ腹も膨れてきた
最近では長らく逢うことが叶わず、まるで恋人が天の川で隔てられているようだ
重々しい塀に守られて隔絶され、一人わびしく座禅を組む日々の暮らし
花を奉じて葉を洗い、屋の鳥の鳴く声で目を覚ます
都の人々やことがらの雑多なことを思いながら 維摩の如く座禅を組みなおす
詩の題の星洲寓公とは邱菽園のことを指す。康有為はシンガポールに半年間逗留し、1900 年 8 月 9 日にシンガポールを離れ、ベナンへ移った。

79 李励図「海峡政府の孫中山に対する態度（1900-1911）」、『辛亥革命と南洋華人シンポジウム論文集』（台北：国立政治大学国際関係研究センター、1986 年）、166 頁。

80 惠州蜂起、または「庚子惠州之役」と称する。1895 年の広州蜂起失敗後、興中会は新たな反清武装蜂起の発動を計画しており、これも孫文が始動する比較的大規模な蜂起の一つであった。1900 年 10 月 8 日、興中会会員・鄭士良は孫文の委託を受け、会党（民間の秘密結社）のメンバー 600 余名を率いて惠州三洲田で蜂起した。後に日本の台湾総督が孫文の上陸を許可しなかったため、弾薬が尽き、鄭士良は孫文の指示に従って、やむなく大部分の蜂起軍を解散させ、一部の兵士を連れて香港に逃れた。

81 和田正之、芦益平合著、「孙中山先生与日本九州」第二届海外华人研究与文献收藏机构国际合作会议论文、香港中文大学、2003 年 3 月 12-15 日、5 頁。

82 この事件について、当時英字新聞『海峡時報』と中国語新聞『叻報』が 1900 年 7 月 12 日に詳細を報じている。ここに『叻報』の記事（「康有為攻撃の疑い、重要事件の記録」）を転載する：“日本から来星した日本人二人は、日本から香港経由でシンガポールに到着した。この二人は日本で康有為と交流があり、シンガポールで康と面会しようとしたところ、国に逮捕されたが、詳細な情報を得て実情を記録したため、ここに公に報ずる。この二人の日本人のうち一人は宮崎寅蔵氏、もう一人は清藤幸七郎氏である。極めて裕福な家の出身で、その才覚もよく知られている。先月シンガポールに到着し、シンガポールに逃亡中の康有為と面会しようとしたが、康はそれを拒否した。次いで本国の警官が通報を受け、二人の日本人が滞在する Bras Basah Road（ブラス・バサー・ロード）のホテルに赴き、二人を逮捕して拘留所で取り調べた。当時日本の駐シンガポール領事はこの知らせを聞き、